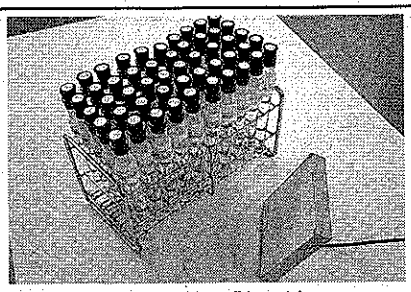
ホロニック

ICタグで試験管識別

自動読み取り 人件費とミス削減

電気回路設計のホロニック（福島市、斎藤宏社長）は、血液検査などに使う試験管の自動識別装置を開発した。ICタグ（荷札）を使うため自動で一括読み取りが可能。従来使っているバーコードは手作業の管理で間違いが起きやすいうえ、血液の冷凍保存時に破損しやすい欠点もあった。人件費削減とミス防止を急ぐ検査機関の需要を狙う。



50本の試験管に貼り付けたICタグを一度に識別する

無線で情報を読み取るRFID（無線自動識別）方式のICタグを使う。愛知県赤十字血液センターとの実験では、同センターの一回の検査単位である五十本の試験管をほぼ一〇〇%の確率で一括で読み取れるという。試験管との間に特殊な反射板を付ける独自技術により、水分に電波を吸収されやすいRFIDの欠点を解消した。

ICタグは量産時で枚約五円。バーコードの約十倍だが、手作業による一枚ずつの読み取りや冷凍時の破損で読み取れない場合の照合にかかる時間や費用、人為的なミスを大幅に減らせる。

大手印刷会社と電子デバイス商社と連携して検査機関に売り込む計画。

200年企業 □47

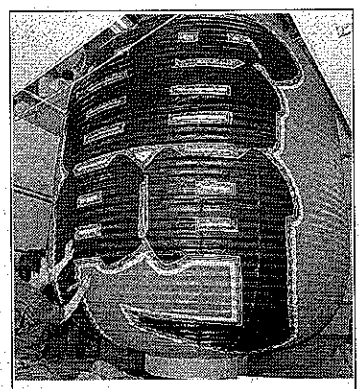
——成長と持続の条件

人育成、未来を照らす

高橋提燈、手作業で一貫生産

竹を骨組みに筒状の形態を作り、周囲に和紙を張る。中にろうそくを立てれば出来上がり。一見、単純な工程だが、曲線を描く竹の加工・調整から文字・文様の書き入れまですべて手作業。高橋提燈（京都市）は直径十数㌢の懐中用から高さ四㍍の巨大モニュメント（記念構造物）まで単品注文を受け付け、「全製造工程の自社一貫生産」を売り物にしている。

蛍光灯から発光ダイオード（LED）照明への転換が加速する時代。言うまでもなく、ちょうちんの需要は頭打ちだが、同社の受注量は決してじり貧ではない。インターネットのホームページ（HP）を見て、ちょうちんは消耗品。竹の骨が折れたり、和紙が破れ、色落ちすれば作り替えが必要になる。「神社や寺から『従来の注文先が廃業したので代わりに同じ物を作ってほしい』といった依頼が多い」と十三代目当主ちんを製造する。二〇〇八年五月期の売上高は一億三千五百万円。この五年間ほぼ同水準を維持している。



浅草寺の大ちょうちん

東京の浅草寺。雷門の大ちょうちん（直径三・六㍍、高さ四・二㍍、重さ七百五十㌔）は高橋提燈の製作。雷門は一八六五年の田原町火災で焼失し、一九六〇年に松下幸之助氏の寄贈で再建した。ちょうちんは当初東京の業者が作っていたが、七〇年代から高橋提燈が引き継いだ。十数年に一度新調する。二〇〇三年に四度目の掛け替えが行われた。

創業は一七三〇年。琵琶湖西岸の高島（現在の滋賀県高島市）出身の初代佐兵衛が「近江屋」を名乗り、（一八六四年）で店舗が焼失したため現在本店がある柳馬場綾小路に移転。ちょうちん製造販売に転業したのは明治に入ってからだ。

百年以上続いた扇子問屋に見切りをつけたのは、九代目の佐助。「扇子は夏にたる十一代目の時代になってから。戦時下で各地の祭需要も打撃を受けた。戦後は電気照明器具の一段の普及とともにちょうちんは「過去の遺物」となった。

同社が最盛期に抱えていたちょうちん職人は数十人。店の近くに彼らの仕事場にもなる住居を数軒建て、貸していたが「経営が苦しくなると祖父はこれらの不動産を切り売りして食いつないだ」。高橋社長が祖父の下で後継者として修業したのは昭和二十年代後半から。ちょうちん製造業者の廃業ラッシュが始まったころだ。十二代目の父は四歳の時に病死、祖父は父親代わりでもあった。

その祖父から聞いた家訓がある。「元裕先廉（げん市太郎の時代に宮内庁京都御所の御用達となった。

事業が傾いたのは昭和に入り、高橋社長の祖父にあ社長）。素材は同じ竹と和紙。転業は成功、十代目の く売る。当然もうけは減るが、それは経営努力で何とかなる。さらに支払いは手形は使わず現金決済。「取引先の印象がよければ納期を早めてくれたり、無理をきいてくれるようになる」と効能を聞かされた。

ちょうちんの需要は回復しなかったが、同業者の廃業とともに営業地域を全国に広げ、受注量を維持できた。目下の経営課題は「職人の確保と技術の伝承」。ちょうちん職人は一人前になるのに五—十年を要する。雇ってから、少なくとも最初の五年間は会社の持ち出しになるが、その投資がないと職人は育たない。「目先の利益にこだわる人

アラン、海外旅行3000プラン 仏通信系サイトで販売

海外旅行会社が企画した各種ツアーをインターネット上で販売するアラン（東京・新宿、荒木篤実社長）は九日、仏AFP通信系の日本語サイトと販売促進で連携する。アランが自社サイトで販売する三千種類の旅行プランを連携先のサイトから申し込めるようにする。旅行の販売窓口を広げ今年の販売数を前年比五割増の二十万件にする。

仏AFP通信とクリエイティヴ・リンク（同・港、古角将夫社長）が共同運営する日本語の情報サイト「AFP BB News」と組む。同サイトからアランが仲介する世界三十七カ国にまたがる観光ツアー、体験ツアーを予約できるようにする。

アランは大手旅行会社とも連携し、七日から旅行会社の海外旅行用サイトでアランの商品を掲載し始めている。提携サイト経由で予約が決まると、アランが成果報酬手数料を払う仕組みだ。

同社は旅行愛好者の好みにあった各種プランを中間代理店を挟まず現地の旅行主催会社と直取引することで、割安な料金でネット販売する。

携帯マットレス

就寝時の体圧分散

クッション製造販売のウィーヴァジャパン（愛知県大府市、高岡本州社長）は携帯用マットレス「エアウィーヴ ポータブル」を発売した。就寝時の体圧をマットレス全体に分散する構造に敷くタイプ。ポリエチレン製の極細繊維状樹脂を立体的に編んで適度な反発力をもたせた。

幅九十八㌢、長さ百九十五㌢、厚さ三㌢。自宅で水洗いできる。価格は四万七千二百五十円。自社サイト

ウィーヴァジャパン

エアウィーヴは寝具の上

同社は、電力会社向け配電機器の日本高圧電気（同、同）の子会社。釣り糸製造装置メーカーだったが、二〇〇四年にクッション材に進出した。樹脂の編み方により、マットレスの厚みや硬さを自在に変えられるという。

列島ダイジェスト

@のついた記事は会員制サイト「日経ネットPLUS」（http://netplus.nikkei.co.jp/）に詳細を掲載